

陸前高田市立博物館は、昭和三四年一月一日、旧気仙町役場庁舎を一部改装し、岩手県第一号の登録博物館としてその第一歩を踏み出した。この第一歩は、東北地方における公立博物館としての第一歩でもあった。その後、昭和五年七月、展示内容の充実をはかり、現在地に移転開館し、今年開館四二周年を迎える。

●まちに生きるミュージアム●第3回

対話する博物館

—陸前高田市立博物館の歩みから—

陸前高田市立博物館学芸員
熊谷 賢

本稿では、開館当初からの地域に根ざした博物館活動と、それを支え現在の陸前高田市立博物館を作り上げた市民の方々の関わりを紹介する。本稿が今後の博物館活動の何らかの一助となれば幸いである。

1 一五万点の資料

当館は、延床面積約一二〇〇㎡の小規模博物館である。収蔵庫面積は、約二二〇㎡弱であるが、この狭い収蔵庫に実に約一五万点にも及ぶ資料が保存されている。収蔵資料は総合博物館という性格上、化石標本・昆虫標本などの自然系資料をはじめ、考古資料・民俗資料などの人文系資料から昭和のマンガに至るまで多岐にわたり、本市に関係する資料すべてを対象として収集されたものである。

資料購入費がほとんど皆無に等しい当館では、この膨大な資料のほとんどが市民の寄贈によるもので、開館当初より継続して地道に行ってきた市民への呼びかけに対する結果である。さらに、収集した資料に対しては、当然のことながら「市民からの預かりもの」とあるという意識にたつて資料の整理・保管を行い、寄贈者が博物館を訪れ資料の所在・保管状況などを聞かれた際には、誠意をもって対応してきた結果でもある。このような積み重ねが、博物館では寄贈した資料を大事に保

管してくれているのだという信頼を生み、「まず、博物館に」という意識を定着させてくれたのである。

また、平成七年度から実施している「民俗資料収集整理事業」では、民俗資料収集協力員（七〇歳を越す市民から構成される）を五名委嘱し、資料収集の円滑化と、より一層の体制強化を図っている。この事業の導入によりこれまで以上に資料収集の中核に市民の参加が可能となったのである。

2 市民の生んだ特別企画展

当館では、年二回の特別企画展を開催している。特別企画展は、他機関の収蔵資料を借りてきて展示を構成する「借り物展示」は極力避け、館蔵品による「自前展示」を行い、独自性を保つように心がけている。しかしながら、資料が未収集のため展示の構成上欠ける部分が出てくる場合がある。平成七年に開催した「陸前高田の昭和史」展では、さまざまな角度から本市の昭和を捉えるため展示を企画したが、子供の資料、特にマンガが未収集のため、展示構成の上で苦慮していた。そこで、地元の新聞社にお願いし、昭和のマンガの収集を呼びかけた。すると記事が掲載された翌日、市民の方から寄贈の申出があり、実に三〇〇冊を越す昭和のマンガが一括寄

贈されたのである。これには、驚きと感激を感じたと同時に、また、当館の宝が増えたという喜びでいっぱいになったことを覚えてい

示としてマスコミ各社にも大きく取り上げられた。市民の寄贈資料と声がヒントになって開催されたこの特別企画展は、まさに市民の生んだ特別企画展である。

3 市民が育てた博物館とマンパワー

当館のこれまでの活動は、さまざまな市民のマンパワーによるところが大きい。その一つが、地元の岩手県立高田高校の生徒たちによる活動である。特に自然科学部の動植物の野外調査活動は、膨大なデータを蓄積しており、採集された資料はすべて博物館に寄贈され、本市の自然を知る上での基礎データとなっている。さらに、このような活動を行った高校生たちは卒業後も博物館活動に加わり、資料提供や情報提供に協力してくれている。また、社会人となっても熱心に研究活動を続けられている方も多い。当館の昆虫学の専門研究員の中の一入である。実は、筆者自身も同校の考古学同好会の卒業生で、博物館によって育てられた一人である。

このようなマンパワーは、職員数の少ない（学芸員一名）当館にとっては、各種事業を進めて行く上で大変重要であり、多くの市民が教育普及事業などのサポーターとなって参加しており、現在一一の講座・観覧会の実施を可能としている。このマンパワーが博物館

を育て、次のマンパワーを生むのである。昆虫に興味を持ち続け博物館によく足を運んでくれているある小学生は昨年、中学生となり昆虫学講座に参加してくれている。彼は、先輩たちを指導するサポーターとして活躍してくれるだろう。次代を担うマンパワーの誕生である。

4 対話する博物館

これからの博物館はどうあるべきか。非常に難しい問題であるが、当館の四二年間の歴史を振り返ってみると、常に市民との関わり（対話）があったのではないかと感じる。先日一人の女性が「散歩をしていたら見慣れない花があったので持ってきました」と私を訪ねてきた。二人で植物図鑑とにらめっこを続けた。花の名前は「フデリンドウ」。小さな花だがその女性は、「野焼きをされて少しだけ残っていました」と少し悲しそうに話してくれました。このようなことは日常茶飯事である。しかし、私はこのような対話の積み重ねが、市民の博物館へ対する意識を変えているのではないかと考える。散歩の途中、学校帰り、ちょっと博物館によつてみよう。新しい発見があるかもしれない。そういう博物館が地域に根ざした博物館ではないだろうか。